

HRQOL for DRF-JHTS

評価マニュアル

第1版



JHTS

一般社団法人 日本ハンドセラピー学会

【意義】

医療の領域における QOL (Quality of Life) は健康関連 QOL が用いられている。患者中心型医療における治療の効果判定には、関節可動域や筋力といった客観的評価とともに対象者自身が報告する患者立脚型アウトカム (Patient Reported Outcome) として健康関連 QOL が重視されている。測定尺度は大別して包括的尺度と疾患特異的尺度 (あるいは身体部位特異的尺度) があり、疾患を限定する場合は、当該疾患の特徴が反映される疾患特異的尺度が判定指標として有用とされる。本学会で開発した HRQOL for DRF-JHTS (Health Related Quality of Life for Distal Radius Fracture Japan Hand Therapy Society) は、ハンドセラピー領域の対象疾患として最頻と考えられる橈骨遠位端骨折に対する疾患特異的健康関連 QOL 測定尺度である。当該骨折患者に対する疾患特異的尺度は存在せず、既存評価表とも遜色のない妥当性、信頼性が担保されたことからハンドセラピーの効果判定指標として有用である。

【目的】

橈骨遠位端骨折患者における健康関連 QOL の指標として用いる。

【評価項目】

下位項目は大別して橈骨遠位端骨折に特有の“症状 (Q1)”と、“日常生活上の困難感 (Q2)”で構成されている。また、開発段階における因子分析において、設問 1～5 は安静時痛、運動時痛、尺側部痛や環境依存性の疼痛やこわばりといった橈骨遠位端骨折の「症状」、設問 6～11 については手の形状や腫れ、違和感や恐怖心の手の使用への影響といった「精神的負担感」、設問 12～15 については重量物運搬や日常生活における「手の使用に対する不安感」に分類された。

同様に、設問 16～24 は受傷側での動作について問う「日常・社会生活活動」、設問 25・26 は「外出」に分類された。

【評価対象】

認知機能に支障がなく、日本語を理解し下位項目の理解が可能な 20 歳以上の橈骨遠位端骨折と診断された患者が対象である。対象者の治療方針として保存療法、観血的療法のいずれも問わない。なお、20 歳未満の者についての妥当性と信頼性は検証されていない。

【評価手順】

HRQOL for DRF-JSHT (用紙)、および筆記具 (ボールペン、鉛筆等) を準備したうえで対象者による自己記入を原則とする。読解や自己記入が困難な場合は評価者が読み上げ、記入する。

【採点方法】

全ての項目について対象者自身が最も当てはまるものを選択し、評価得点とする。もし、実際に行っていない項目がある場合は、実施したものと想像して評価してもらう。

それぞれの判定指標は、以下の如くである。

■ Q1 における判定指標 (項目 1～15)

1. 「全くなかった (1)」
2. 「少しあった (2)」
3. 「ときどきあった (3)」
4. 「わりにあった (4)」
5. 「すごくあった (5)」

■ Q2における判定指標（項目16～26）

1. 「問題なかった（1）」
2. 「少し困難だった（2）」
3. 「中等度困難だった（3）」
4. 「とても困難だった（4）」
5. 「できなかった（5）」

【評価実施の間隔】

実施日を基準として1週間程度前までの状況について回答してもらうため、1週間以上の間隔を空けて実施する必要がある。

【スコアの算出】

スコアを算出するためには原則として26項目全ての回答が必要となる。また、スコアについては、総合評価スコア、要約スコア、下位尺度スコアに分けられる。各スコアの説明および計算式については下記のとおりである。なお、除算に際しては小数点第1位を四捨五入にて算出し、整数で記載する。

- ・総合評価スコア：健康関連QOLの変化について総合的な指標となる。

$$(\text{合計得点 (設問 1~26)} / 26 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)} \text{ ※}$$

- ・要約スコア：橈骨遠位端骨折に特有の症状に関する要約スコア、あるいは日常生活上の困難感に関する要約スコアに大別し、それぞれについての指標となる。

■ 症状の要約スコア

$$(\text{合計得点 (設問 1~15)} / 15 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

■ 日常生活上の困難感の要約スコア

$$(\text{合計得点 (設問 16~26)} / 11 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

- ・下位尺度スコア：要約スコアを構成する下位尺度に分類し、各因子における指標となる。

■ 症状スコア

$$(\text{合計得点 (設問 1~5)} / 5 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

■ 精神的不安感スコア

$$(\text{合計得点 (設問 6~11)} / 6 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

■ 手の使用に対する不安感

$$(\text{合計得点 (設問 12~15)} / 4 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

■ 日常・社会生活活動スコア

$$(\text{合計得点 (設問 16~24)} / 9 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

■ 外出スコア

$$(\text{合計得点 (設問 25~26)} / 2 (\text{回答項目数}) - 1) \times 25 = \text{評価得点 (0~100)}$$

【スコアの解釈】

スコアが低いほど、主観的困難感が低いと評価される。健康関連QOLの特性上、介入効果を判定する場合には一定数のデータに対してスコアの推移から判断することが望ましい。MDC（Minimally Detectable Change：最小可検変化量）とMCID（Minimally Clinical Important Difference；臨床的に意味

のある差) については検証されていない。また、健康関連 QOL として使用する際は、測定している概念の幅の広さが重要であることから、総合評価スコアを用いることが望ましい。一方、治療計画を考える際は、要約スコアや下位尺度スコアを治療戦略の参考として活用することが期待される。

【文献】

・飯塚照史, 桂理, 野中信宏, 原田康江, 佐藤彰博. 橈骨遠位端骨折に対する疾患特異的健康関連 QOL 尺度の開発 -HRQOL for DRF-JHTS-. 日ハ会誌 15 (4), 149-155, 2023.